

「喜びのあまり信じられない」 ルカ 24 : 36 ~ 49

I 導入部

おはようございます。4月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、私たちの救い主イエス・キリスト様に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

先週は、イースター礼拝でした。幼稚科・小学科ではきのこ公園で野外礼拝と卵探しを致しました。第一礼拝後には、岡村成子さんが洗礼を受けられ、私たちの青葉台教会の一員となりました。岡村姉のためにお祈りください。

礼拝後は、祝会があり、関内美恵子姉から岡村姉の紹介と塚本良樹先生の歓迎の時が持たれました。塚本先生と柳瀬雄太兄のデュエット、梶原結姉と江上まりや姉のデュエット、梶原結姉の証し等、良き時を持つことができました。いつものように司会の御用にあたって下さった長瀬兄に感謝致します。

各自が新しい歩みを始めた4月です。2018年度が始まりました。この月も主イエス様から目を離すことなく、主イエス様が共におられることを信じて、各自の信仰の歩みをさせていただきたいと思います。

さて、今日はルカによる福音書24章36節から49節を通して、「喜びのあまり信じられない」という題でお話し致します。

II 本論部

一、イエス様がみえるみえる

36節には、「**こういうことを話している**と」とありますが、こういうこととは、エマオ途上のお話しでしょう。クレオバともう一人の弟子がエマオに向かう途中にイエス様が現れ、最初はイエス様だとわかりませんでした。宿でイエス様がパンを裂いて渡された時、イエス様だとわかったということ、イエス様は確かによみがえられたと確信した二人は、エルサレムに戻ると、イエス様の弟子11人が復活してシモンに現れたと言っていたというようなことを話しているとイエス様が彼らの真ん中に立って、「**あなたがたに平安があるように**」と言われたのです。

37節には、「**彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。**」とあります。クレオバともう一人の弟子から、イエス様の話しを聞き、イエス様が復活してシモンに現れたと話しておきながら、そのイエス様が現れると幽霊だと思い恐れおののいたというのです。復活という信じられない出来事が今自分たちの目の前で起こっていることに対して、死んだイエス様が生きて目の前にいる現実に、恐れおののきつつ、目に見えるイエス様の姿を現実とは思えないゆえに、幽霊だと思ってしまう弟子たちの姿があります。

そのような弟子たちに、イエス様は語られるのです。38節です。「そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。」新改訳聖書では、「なぜ、取り乱しているのですか」とあります。女性たちやクレオパたちから聞いたイエス様の復活の事も信じられない弟子たちでした。今、彼らの目の前に現れた復活されたイエス様を見ながらも、なお、恐れおののき、取り乱している彼らに、イエス様はなぜ心に疑いや疑問を持つのかとやさしく問われたのです。

39節を共に読みましょう。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおり、わたしにはそれがある。」夏のなると、ホラーとか幽霊の映画やテレビが放映されます。いろいろな怪奇現象を検証するというものもあります。人間の考えや常識では考えられない出来事や現象が確かにあるのです。弟子たちは、イエス様の復活もそのようなホラー映画のような、幽霊、お化けのような感覚でいたのでしょうか。日本では、いるはずのない人が目の前にいたら、お化けかどうかを確かめるために、足があるかどうかを見るところがあります。日本では、お化けには足がないのです。けれども、海外のお化けなるものには、足があります。イエス様は、復活のイエス様には、私たちと同じ骨や肉があるのです。手で触ることができるのです。イエス様は、十字架につけられた時の傷のある手と足を弟子たちに見せられたのです。

復活は、幽霊やお化けの話ではありません。イエス様には骨や肉がありました。私たちが先に召された人々と天国で会えるのは、幽霊のような存在で会うのではなく、私たちが見える形を持って会えるということを示しているのではないのでしょうか。骨がある、肉があると言っても、私たちと同じ死ななければならぬ朽ちるべきものではなく、朽ちないものであると思うのです。主のよみがえりは私たちにとっては、大きな希望なのです。

二、食べることは復活のあかし

41節には、「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、」とあります。「喜びのあまり信じられない」これが、今日の説教題です。私たちも、うれしさのあまり、喜びのあまり信じられないということがあるのでしょうか。リビングバイブルには、「弟子たちは、うれしいにはうれしいのですが、まだ、半信半疑です。」とあります。

受験のシーズンが終わりましたが、先生や友人から、あの学校は絶対に合格できないのでやめておくように言われながら受験して受かったとか、絶対にノーと言われるだろうと予想しながら求婚したらオーケーしてもらえたとか、それが本当だったらうれしいのですが、その答えがあまりにも想像できない、素晴らしい事なので、信じられない。受け入れられない状況でしょうか。かつて、プロ野球の日本ハムファイターズの監督であったヒルマン監督はリーグ優勝、日本一になって、インタビューの時、「信じられない」という言葉で大変有名になりました。現実にパリーグで優勝し、日本シリーズでも優勝しているにもかかわらず、「信じられない」と叫んだ。しかし、それが、正直なヒルマン監督の思いだったのでしょう。春のキャンプの練習の時から、チーム状態を見ていて、まさか優勝、日本一になるとは思えなかったけれども、優勝したのです。

弟子たちにとっては、愛する先生であるイエス様が十字架につけられて犯罪人として裁かれ、死んだという事実は、大きな悲しみでした。絶望を経験したのです。しかし、その愛する先生、イエス様が復活したという話を聞いた時、本当はうれしかった。あのイエス様が復活された。手を取り合って喜び合いたかった。しかし、理性が、常識がそれを邪魔してしまったのです。「**そんなことは信じられない。そんなはずはない**」と。

そして、そのイエス様が目の前に現れて、手と足を見せられたのです。十字架で傷ついたイエス様の手と足を見ながらも、ここに生きておられるイエス様がおられることを確認しながらも、それはうれしいこと、喜ぶべきことなのですから、素直に喜べない。リビングバイブルが訳しているように、「**うれしいにはうれしいのですが、まだ、半信半疑です。**」というのが、本当に正直な弟子たちの気持であったように思うのです。

そのような彼らにイエス様はおもしろいことを言われました。4 1節を見ると、「**ここに何か食べ物があるか**」と聞かれたのです。イエス様は三日間、墓の中におられたので、お腹がすいてすいて仕方がなかったのでしょうか。弟子たちが、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエス様は食べられたのです。食べるということは肉体を持つ者の象徴的な事柄です。イエス様は、会堂長のヤイロの娘をよみがえらされた時、聖書には、「**食べ物を少女に与えるように言われた。**」(マルコ 5:43)と記されています。私は先週のメッセージの本論の最初で、「**今まで死人がよみがえるということは、ラザロを除いてはあり得ない事でした。**」と言いましたが、ヤイロの娘、ナインのやもめの一人息子は死んでイエス様によみがえらされました。嘘を言って申し訳ありませんでした。ここで間違いを訂正しておきます。

弟子たちは、イエス様が魚を食べておられる姿を見て安心しました。幽霊やお化けではない。まさしく、自分たちの知っているイエス様だったのです。食べることと復活のイエス様は、深い関係があり、食べるということの大切さを聖書は語っていると思うのです。

三、見える事柄よりも神様の言葉を大切に

イエス様は、復活されたご自分の体を見せて、それでいいとはされませんでした。「**復活した私の体を見て納得したからいいよね**」とはならないのです。復活されたという目に見えること以上に、聖書の言葉、神様の言葉を弟子たちに示されるのです。4 4節を共に読みましょう。「**イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」**」「**モーセの律法と預言者の書と詩編**」とは、聖書全体を指す言葉だと思います。聖書は、聖書全体は、イエス様について語っているのです。ヨハネによる福音書 5章 39節で、イエス様は、「**あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証するものだ。**」と言われました。

リビングバイブルには、「**その聖書は、わたしを指し示しているのだ。**」とあります。ですから、聖書が語る、つまり、イエス様の生涯はすべて実現しているのです。イエス様の誕生も死も復活も。イエス様は、弟子たちが聖書を悟ることができるように、彼らの心の目を開いて下さいました。4 6節を共に読みましょう。「**言われた。「次のように書いてある。**

『**メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。**』 イエス様は、十字架につけ

られる前に、何度か弟子たちに、「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。」と語られました。この内容は旧約聖書に記されてあるのです。イエス様の生涯は預言の成就なのです。

47節は、イエス様の十字架と復活、福音が語られ、罪の赦しを得させる悔い改めがエルサレムから始まることが示されています。48節では、弟子たちが証人となることが記されています。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒言行録 1:8)と聖書は語ります。この聖霊の力が覆われるまでは、エルサレムにとどまっているようにイエス様は語られるのです。ペンテコステ(聖霊降臨日)ですね。聖書の言葉と聖霊の力、導きによって私たちは生かされるのです。

イエス様は目に見えること、癒しの業や奇跡の業、復活の出来事、そのことも大切にされますが、それ以上に聖書の言葉を、神様の言葉を大切にされるのです。私たちは、目に見えるものだけに集中するのではなく、目に見える奇跡や癒しの業だけに固執するのではなく、聖書の言葉によって養われ、神様の言葉を信じて歩みたいと思うのです。聖書は、罪ある私たちのために、神であるイエス様が十字架について、私たちの罪の代わりに裁かれ、尊い血を流し、命をささげて下さったこと、ご自分の死を通して私たちを救って下さったこと、死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえり私たちの初穂となり、永遠の命を与えて下さったことが記されているのです。そのことを信じて感謝したいのです。

Ⅲ 結論部

弟子たちは、喜びのあまり、イエス様の復活の事実を信じられないでいました。けれども、イエス様は聖書の言葉、神様の言葉を示して、また、彼らの心を開いて、信じるように導いて下さったのです。イエス様の十字架と復活、それが事実なら信じたい。私の罪の身代わりに十字架にかかり死んで、私の罪を赦し、魂を救い、復活して、信じる私にも永遠の命を与えて下さる。それが、事実なら本当にうれしい。素晴らしい。それが事実なら信じたい、と思っておられる方は多くいます。しかし、理性が、常識が邪魔をして信じることができない。でも、安心して下さい。イエス様の弟子たちも、そうだったのですから。イエス様を信じていた弟子たちも、疑いの心、取り出してしまうのです。

イエス様の十字架と復活を信じるとは、100%疑いもなく、問題もなく、何の曇りもなく、信じ続けるというよりも、疑いの思いがある。迷ってしまうこともある。本当かどうか取り乱してしまうことがある。それがだめだとイエス様は言われたいのです。そのような弟子たちの心を開いて下さるように、聖霊なる神様は私たちの心を開いて、聖書の言葉を理解できる、悟ることができるように導いて下さるのです。大切な事は、私たちが日々、聖書の言葉に触れて、聖霊の導きの中で、神様の言葉を受け入れて、日々、確信することだと思うのです。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(ルカ 24:32)とクレオパは語りましたが、聖霊様はそのように導かれるのです。この週も聖書に触れて、イエス様を信頼して歩みましょう。